

教養教育とクラブ活動

伊奈美智子

教養部

(2000年9月14日受理)

L'activité du Club de Pétanque
à La Faculté Générale

INA Michiko

(Received September 14, 2000)

はじめに

岐阜女子大学の教養部では、学生のクラブ活動を重んじ、“特別自主活動”という教養教育科目を設け、1年半の活動があり、リーダーシップ論等の特別講義を受講し、レポートをクラブ顧問に提出し、クラブ活動の実際を加味し、クラブ顧問が2単位を出すことになっている。筆者が15年来顧問を務めている、クラブ活動の中のひとつ“フランス語ペタンククラブ”の歩みを辿り、その教育効果について述べてみたい。

I

まず、ペタンクとは、南フランス・プロヴァンス地方発祥のスポーツで1910年に始まったものである。

ビュットとよばれる直径30mmの木製の玉を6mから10mの間に投げ、このビュットに向けて直径約7cmの鉄球をA対B（3人对3人あるいは2人对2人）のチームで投げ合いビュットに寄る近さを競い合うゲームである。

日本の草野球のようにフランスではポピュラーなスポーツである。テニスやバレーボールのように、来たボールをとっさに受けなければならない球技とは違い、どの方向へ投げるかをじっくり考える時間のとれるゲームなので特に体力を必要としない、むしろ先の先を読むといった知能を要するゲームである。したがって、優秀なペタンカーはたいてい他の学科にもすぐれている。ルールは簡単なので留学生にも人気がある。

II

クラブの発足は、岐阜日仏協会がペタンクの講師を呼んで講習会を行い、その大会で本校が優勝したことにはじまる。この時から筆者がペタンクに対して抱いている印象は、非常にイメージトレーニングの効くスポーツだということである。

このときの本校のチームにはそれまでの経験者はなく、他のスポーツにたんのうな学生がいたわけでもなかったのだが、ひとりだけフランスに滞在してペタンクを見たことがある学生がいたことである。

筆者も滞在しペタンクを見たことはあったが経験したことはなかった。優勝を契機にクラブが発足し、数年は大会毎に常に上位入賞をはたしていた。そのうち、小学校でペタンクを経験したという学生が出てきた。この学生は積極的に仲間を指導し、全国的な大会に上位入賞を果たし、学長表彰を何度か頂いた。非公式ではあったが夏季休暇中に南仏の家庭にホームステイしその家族の祖父、父、孫3代のジェネレーションに囲まれてペタンク三昧の日々を過ごした。フランス人はやはりヴァカンス中に家族、友人が集ったときにペタンクをすることが多いようだ。

小さいときにペタンクをやったことがあるというフランス人が多いのはこういうことなのかと納得がいったことである。ビー玉あそびで玉と玉をぶつけ合うゲームがあるが、それをペタンクボールでおこなうことがある。チールという日本では高等な技術なのだが、フランスの子供は先ずこれから入る。遊びとして、ボールにボールをあてることから始めるのである。20歳すぎから始める人の多い日本が、フランスとの実力の差をなかなか縮められないのもうなずける。

毎年7月にマルセイユで行われる世界大会には、筆者しか参加していないが、ミヨーという町での世界大会にはクラブOGで参加した学生が1人いる。

III

日本ペタンク選手権大会で4年次学生と筆者が組んだチームがダブルスで2位になったときの副賞がニューカレードニアの世界大会への参加賞で、4位だった下級生も参加したいとのことで2チーム4名ではじめて団体として海外遠征を果たした。

タヒチ女性の体格の良さには圧倒された。下半身の安定が大事だとこの時ほど肝に銘じたことはない。これを契機にフランス海外県ニューカレードニアの選手が日本に来たこともあって、かの地での大会に出かけるようになった。首都はヌメアであるが会場はいつも都会とはかぎらず、チヨという村で行われたときは早朝より車で島の反対側へゆくという苦行であった。5名の岐阜女子大生で、地元のチャンピオンと組ませてもらった学生は優勝し賞金を獲得した。

さらに、ニッケル鉱山や日本人墓地へ案内され有意義な交流が始まった。

次の交流会には選手の子供たちとも親しくなり、会場で、にわか折り紙教室や日本語教室が開いた。1999年3月には、待望のはじめてのホームステイが実現した。ペタンクの審判員をつとめるブーレーズご夫妻のプロヴァンス風の館に2名が滞在した。ブーレーズ氏は退職して年金生活者だが奥さんは仕事を休んで学生の世話に明け暮れたという感じだった。

もう少し、きびしくフランス語を教えておくべきだったと反省しきりだった。1名は住居学科の学生でフランス語は履修していなかったのだが、現地で習うより慣れる方式がよかったようだ。もう1名は英文学科の学生で“星の王子さま”など暗記していたので披露してよこばれたが、夫妻の友人で英語が得意な男性があらわれるや、英語で話すようになり、帰国してからもインターネットは英語を使用しているらしいので、その友人にフランス語でやりとりするよう注意する必要があった。

ペタンクのほうは顧問がチャンピオンと組ませてもらって、優勝し、トロフィをいただいた。学生も4位に入賞し学長表彰を受けた。このほか国際交流賞として、もう一つトロフィをいただいたので学長にお渡しした。

この交流会は昼食を会長一家がつくってくるという方式でまた選手の子供たち、会員の身障者

とも組んで試合を楽しみ、ボランティア活動も経験したことになった。車椅子の人といってもペタンク競技には珍しくないのだ。

現役選手にも車椅子の身障者はいるし、そもそもペタンクという種目は、プロヴァンサルという3歩跳んでボールを投げるというゲームが得意だった選手がリ्यूマチのような病気になり、車椅子生活になった。それを哀れんだ友人たちが座ったままでもゲームを楽しめるように工夫したものが今のペタンクなのである。

終わりに

岐阜県はひとり1スポーツを推進している県である。そういう県の1大学としてまだマイナーではあるがインターナショナルの大会に出場し、徐々に良い成績をあげ、国際交流にも携わっているクラブ活動がますます盛んになるよう、スポーツ技術もさることながら、フランス語教育にもますます力点を置きたい。

伊自良村の村民と岐阜女子大学のペタンククラブの交流会ももう4年になり、本学の留学生も楽しみにしている実際に伝えてこの稿を終わりたい。



伊自良村との交流会で楽しむ留学生 6.11.2000 撮影者・伊奈美智子



ニューカレドニア ノメア市ココチエ広場のペタンク場
(出)の4時頃から愛好家が集まりにぎわう。見物客も多い。
撮影者・伊奈美智子



日本・NC交流大会 交流会での賞杯を前に。
3.13.2000 撮影者・伊奈美智子